

# 寺院と公共性

お寺を支える仕組み ⑤

## 「無自覚」の宗教性

これまでの『宗報』でお寺を支える仕組みについて、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の視点から報告してきました。ソーシャル・キャピタルとは、人々の信頼や互酬性<sup>ごうじょう</sup>など社会のつながりの豊かさをいい、社会参加意識の高さや地域力なども表現される、地域を支える力です。

それによつてここまで、「年番」<sup>ねんぱん</sup>「番方講」<sup>ばんがたこう</sup>「兼業」などの事例を紹介しながら、地域と寺院の関わりなどを考究してきました。

### ●ソーシャル・キャピタルという視点

ソーシャル・キャピタルという視点による寺院研究の主なメリットとして、次の2点を挙げたいと思います。

その第一に「寺院を中心とした視点でなく、地域を中心とした視点など、多くの視点から寺院の存在を見直す」ことであります。私たちの前には過疎などにより、お寺がなくなっていくという現実の課題があります。その中で苦しんでいる

のは住職・寺族の方々だけではありません。お寺の存続に関するご門徒の苦しみは大変なものであり、さらには地域にとつても大きな課題なのです。地域やご門徒の視点からお寺を見直すことは、このような意味で大切なものと思います。

第二は視点の多元性であります。ソーシャル・キャピタルは地域の側、寺院の側、歴史の側面、など、さまざまな視点から事実を照らします。例えば布教することは報謝の姿ですが、同時に地域の視座を豊かにし、文化を深めるという活動でもあり、歴史的社会的にはいのちに向き合う文化や取り組みをも育んできました。地域と伝道とは密接な関わりを有しますから、立体的に把握することが必要であり、ソーシャル・キャピタルは今後の在り方を見据える有効な視点と言えます。

一方、ソーシャル・キャピタルはそもそも流動的な社会を分析していくものですから、流動性を失って偏<sup>かたよ</sup>って判断すれば、固定的な価値観に陥<sup>おち</sup>ることにもなり

かねません。その点に気を配ることも重要です。

私たちはこのようなソーシャル・キャピタルの視点に基づいて、地域と寺院の関係性についての調査を始めましたが、その場合に一つの予測がありました。

ソーシャル・キャピタル研究の第一人者、ロバート・パットナムは、「宗教的な人々が類希なる積極的なソーシャル・キャピタリストであることは明らかである」（パットナム著、柴内康文訳『孤独なボウリング』七四頁）と言っています。

ここで「宗教的な人々」とはキリスト教の概念が中心ですが、北海道大学の寺沢重法さんは「伝統仏教においても檀家は非檀家よりも社会活動への参加が有意に多い」との見解を示しています。このようなことから私たちは、寺院調査を通してご門徒から「み教えに出会って、社会活動に参加をはじめた」といった言葉に接するものと予測していました。しかし実際のご門徒の方がたの声は異なっていました。

### ●無自覚の宗教性

私たちは2012年度に広島県北部、2013年度は滋賀県北部で調査を行いました。ともに浄土真宗の盛んな地域、熱心なご門徒の多い地域であり、年番（3月号記載）や番方講（5月号記載）などの伝統ある取り組みをはじめ、ビハラ活動、災害支援、連研、ダーナ講、キツサンガ、念仏奉仕団などに積極的に参画するご門徒が多くおられました。その中で、以下の特徴が把握できました。

(1)ご門徒において、その活動が浄土真宗の教義等の聴聞<sup>ちやうもん</sup>に基づくものとの認識を語る人は少なかった。

(2)自己の行動（伝道活動・社会活動・寺院や社会への貢献）について、教義や教団組織に基づいて行動しているという意識を有する人々は「門徒推進員」や「教化団体役員」「ビハラ活動」従事者などに見ることができ、パット

ナムなどのいう典型的なソーシャル・キャピタリストの存在は少数であった。

(3)浄土真宗のみ教えを聞くことと自己の生き方との関係についてたずねた問いに対して、「教えを聞いて特に変わったことはない」と、その関係を否定する応答が多く見られたが、教義への批判的視点は見られず、むしろ教えを聞くことに対する積極性は高いものがあった。

(4)献身的に寺院活動や寺院護持<sup>ごじ</sup>に貢献する動機としては、親や先祖、地域の先輩の存在をあげる人が多かった。

これは広島県、滋賀県に共通の結果ですが、ご門徒の方がたは自己の行動について「み教えや聴聞に基づいて得られた自覚的行動なのか」と問う質問に対しては、否定的な応答が目立つとの共通結果が得られました。一部に「お寺があつて下さって本当にありがたく感謝したい。そんな思いから、地域のビハラに参加している」といった方もおりましたが、

お聴聞は好きだが、お寺の護持は「ウチのお寺」（3月号記載）だし、それ以外に特になく先祖以来大事にしている、といった意見に多く接しました。

私はこの結果自体が一定の特徴を持った独自のソーシャル・キャピタルの形態を示唆している印象を受けました。これについて、大阪大学の稲葉圭信さんなどは、日本社会の基底にある宗教の積極的な公共性を評価し、「無自覚の宗教性とソーシャルキャピタル」という研究をすすめておられます。ここではその内容に深く入りませんが、「他者への信頼や思いやり、和合の心などが日本人の精神的基盤をなしてきた」と指摘し日本社会の基盤にある無自覚な宗教的情操を社会構築の重要概念として再評価しようとされています。

私たちの調査はその指摘を裏付けるものでした。確かに個人の「教えの学び」がそのまま行動基盤になっている方もおられました。多くの方は教えを聞く前から寺院や社会貢献に対して積極的な生き方をしておられました。これはつみ重ねられた教えの土壌となって反映されていることを示しています。このことはさらに寺院についての新たな知見をもたらしました。

●「お寺にいてくれてありがたい」

私たちが取材を重ねた中で、特徴が見られたものに、住職・坊守への評価の基準がありました。私たちは主にお寺との関係のよいご門徒の方がたに取材してきたので、多くのご門徒より住職・坊守自慢が聞かれました。その内容に次のような特徴がありました。

まず、住職に対する好評価として突出して多いものが「お参りに熱心」というものでした。また、住職・坊守共通の好評価として多いものが「親しみやすさ」というものでした。その「親しみやすさ」の具体的例としては、「お寺の活動の際によくご門徒に向き合ってくれる、地域の活動に積極的に参加してくれる」とい

った内容でした。

これらから、私たちは熱意ある住職・坊守がすぐれたソーシャル・キャピタルの実践者となっており、それが評価につながっていることは容易に聞き取れました。

それとともに、お参り等の寺院活動や、お寺そのものの存在を、ご門徒が公共的に感じることが理解されてきたのです。広島、滋賀ともに、寺院の護持をする住職・坊守に対しご門徒から「ありがたい」という感謝の言葉がしばしば聞けました。

先に「宗報」3月号（2015年）で、熱意あるご門徒の方がたにおいて、「ウチのお寺」との意識が高いことを報告しています。この「ウチのお寺」は単に自己の所有を意味するのではなく、もっと深いものでしょう。現代の別な地域の人々がこぞって「お寺にいてくれてありがたい」と口にするわけです。これらのことから、次第に私たちは寺院は公共的な存在であり、「ありがたい」といった表現

は、「たいせつなもの」を大切にしてくれるといった時間空間の広がりを持った感謝の言葉と考えるべきだと気付いてきました。

このように「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」について考えることは、寺院の持つ基層にせまっていくことができるものであり、寺院にかかわる人々の意識を丁寧（ていねい）に把握していく作業を通し、寺院存在の積極的側面を把握できるのではないかと思います。

●お寺はだれのもの

以上のことを、まとめて表現すれば、ご門徒においては、寺院存在を「公共的なもの、地域になくならないもの」と意識されているのが分かってきました。その点「宗報」5月号で講の分析の中、集落への愛着と寺院への愛着とが深く結びついている例をあげました。これは広島、滋賀ともに見られた在り方です。

私たちはさまざまな手段で聞き取りや取材を重ねていますが、その中で特徴的な言葉に接しました。

その方はあるお寺のご門徒で、お寺以外の場所取材してみると、「お聴聞は難しい」「組内の住職はみな勝手」など、厳しい批判の言葉が続きました。「自分の家も子どもが出て行き、過疎で地域もなくなってしまう」と嘆かれた後、「でも、お寺はなくなつては困るし」と一言語られました。住職・坊守・寺族・組・地域すべて批判した上で、その言葉を漏らされました。「我が家がなくなる、でもお寺はなくなつては困る」。ご門徒における寺院の存在をあらためて感じたこととです。

調査の中で把握されてきた、寺院にくくし、寺院と地域やご門徒を結ぶ住職・坊守の姿勢が、突出して好評価になっていたのは、このような寺院存在が支えているものの大きさをも物語っていたと考えられます。

このように、私たちの調査が「寺院を支えているもの」だけでなく「寺院存在が支えているもの」をも考えることができたのは望外なことでした。その寺院存在が支えているものは、どのようなものでしょうか。また、寺院は公共的存在として何をしていくのでしょうか。本稿でソーシャル・キャピタルと滋賀、広島寺院調査の報告は終わりますが、さまざまな視点をふまえ、積極的側面のみならず総合的に考えながら、さらに調査をすすめていきたいと思えます。

（浄土真宗本願寺派総合研究所上級研究員 坂原英見）

\* ソーシャル・キャピタルについての詳しい説明は「宗報」2013年8月号にあります。

\* 「現代日本における宗教とボランティア活動——J.G.S.S.（日本版 General Social Surveys）の計量分析から——」『日韓次世代学術フォーラム国際学術大会発表稿集』8・197～200頁、2011年。

\* 「無自覚の宗教性とソーシャルキャピタル」『宗教と社会貢献』1(1)・3～26頁、2011年4月。